



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

4

スウィフト

ガリヴァ旅行記

中野好夫 訳

フィールディング

ジョウゼフ・アンドルーズ

朱牟田夏雄 訳

中央公論社

世界の文学 4

©1966

スウィフト

フィールディング

訳者 中野好夫

朱牟田夏雄

昭和41年9月1日初版印刷

昭和41年9月10日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 中央精版印刷株式会社製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話 (561) 5921(代) 振替東京34

目次

スウィフト

ガリヴァ旅行記

3

フィールディング

ジョウゼフ・アンドルーズ

277

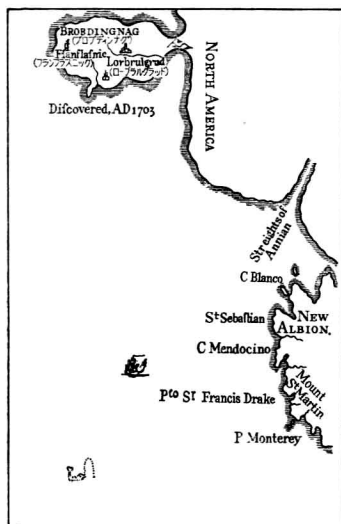
解説

574

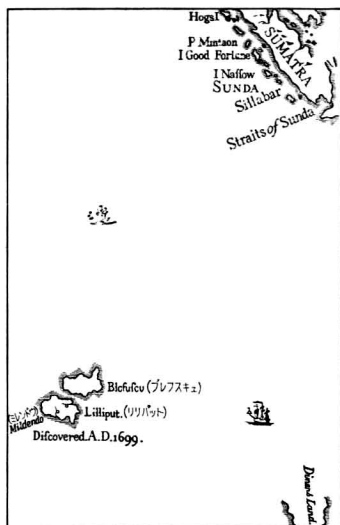
年譜

586

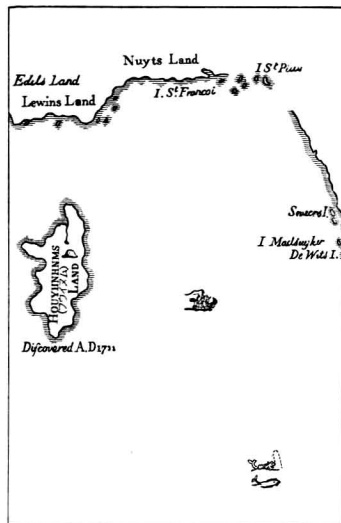
ガ
リ
ヴ
ア
旅
行
記



第2図 プロブディンナグ (大人国)



第1図 リリバット (小人国)



第4図 フウイヌム国



第3図 ラビュタ周辺

刊行者の言葉

本旅行記の著者レミュール・ガリヴァ氏は、迂生^{うせい}年来の親友であるばかりでなく、また、母方を通して親戚関係でもあるのであります。三年ばかり以前、ガリヴァ氏はレドリッフの彼の家へ殺到する好事家^{こうじか}連にいや気がさし、郷里なるノティンガムシアはニユアクの片ほとり^{かたもと}にささやかなる地所と手頃なる居宅とをもとめ、爾来^{これより}はこの地に隠棲^{かくせい}しているのであります。彼に對する近隣の尊敬は依然たるものであります。

ガリヴァ氏の生まれは、父君のおられたノティンガムシアであります。直接彼から聞いたところによれば、一家は本来オックスフォードシアの出である由、現に迂生が調べましたところでは、たしかに同州バンベリの教会墓地に、ガリヴァ家の墓碑が数基ございました。

彼はレドリッフを引き払います以前に、実は本書の原稿を迂生に委ね^{ゆだね}まして、その処置はいつさい迂生の適当な判断に一任すると、そういうことでございました。で、迂生はたんねんに実に三度閲読いたしました。文体はまことに平明簡潔、強いて欠点と申しますれば、著者が、

そこは世上旅行者の常として、詳細委曲を尽くしすぎているとでも申しましょうか。だがしかし、全篇を通じて真実の氣は蔽^{おほ}い難く、殊に著者の正直さに対する世評は非常なるものでありまして、現にレドリッフ近郷におきましては、何事にまれ確言する場合には、ガリヴァ氏の言のごとく真実である、と申し添えますことが、謬^{ことごと}めいたものにさえなっているようであります。

迂生はその後、著者の諒解を得まして、数人の大家諸氏に該原稿の内閲を乞い、その忠告によりまして、今これを上梓^{じょうし}いたす次第であります。が、少なくともここ当分、本書が青年読者諸君にとって、世上流布の政治政党的の雑書類などよりは、遙かに興味深いものであらうことを信ずるものでございます。

なお本書は、各航海中における風向、潮流、ならびに偏差、方位等に関する夥^{おびただ}しい叙述、あるいは海語によって記された、暴風雨中の船の操作に関する詳細な描写、あるいはまた経度緯度に関する記事等を、迂生の判断により思いきつて削除したものであります。が、もしそれを致しませんでしたらば、量において本書は少なくともこの二倍大になったでございましょう。この点はガリヴァ氏として多少不満もあらうと存じますが、迂生としては、できるかぎり本書を一般読者の理解に近づけたいという微意でございました。もっとも海上生活に関する迂生の無知

からして、多少とも過誤を犯しているような点がございますならば、その責は一にかかって迂生にあるわけであります。もしまた旅行家諸彦しゅげんにして、本著作の全篇を、著者の筆になる原形そのままにおいてご覧になりたいというご熱心なる意向の向きは、喜んでご要求に副こたうつもりであります。

本著者に関してこれ以上の詳細は、本書冒頭の章についてご承知を願いたいと存じます。

リチャード・シンブソン敬白

第一篇 リリパット（小人国）渡航記

第一章

著者の生立、家族のこと——はじめて航海に
ずる顛末——難船、身をもって泳ぎ逃れ——無
事リリパット国海岸まで辿りつき——囚われの
身となりて、護送されし次第々々。

親父おやぢというのはノティンガムシアでわずかばかりの土地持だった。我輩わがはいは五人兄弟の三番目であつたが、十四になると、親父は我輩をケインブリッジのエマニュエル学寮に遊学させた。ここで三年間みっちり勉強したのであるが、なにぶん貧しい身代には、我輩の遊学費が（といつても、むろん、ひどく足りないがちな仕送りであつたが）、どうにも大きすぎる負担だというので、当時ロンドン一流の医者でジェイムズ・ペイツ氏ペイツというのに書生にやられた。ここに四年間、その間親父からも、ときどきわずかながら送金があつたので、こいつを資本に航

海術とかその他いろんな数学、つまり旅行でもしようという人間にさしづめ役に立つ学問を勉強した。というのが、我輩常に信じていたことは、他日必ず海外旅行に出る、これが自分の運命だと、そんな気がしていたからである。ベイツ氏の許を去ると、親父の家へ帰り、親父やジョン伯父、それから他の親戚たちの助力を得て現金四十ポンドと、それに生活費として年々三十ポンドを出してやるという約束を貰ってライデンへと赴いた。ここでまた二年と七ヵ月、将来長い航海に出た場合などに必ず役立つものと思つて、医学を修めた。

ライデンから帰ると、早速、恩師ベイツ先生の推薦で、エイブラハム・パネル中佐という男が船長をしている『燕』号***というのに船医となり、ここでも三年半、レヴァントその他へ一、二度航海をやった。帰ると今度はロンドンで一つ開業してみようと思つた。さいわいベイツ先生も力になってくれて、数人の患者まで紹介してもらつた。まずオールド・ジュリ***に小さい家を手に入れ、それからいつそ身を固めてはという話で、ニューゲイト街***の靴下屋で、エドマンド・バートンという者の二女メアリ・バートンを貰い受けることになり、その際、持参金として四百ポンドを貰つた。

ところが二年ばかりすると、ベイツ先生はなくなれる、と他に友人といつてもほとんどない我輩なので、商

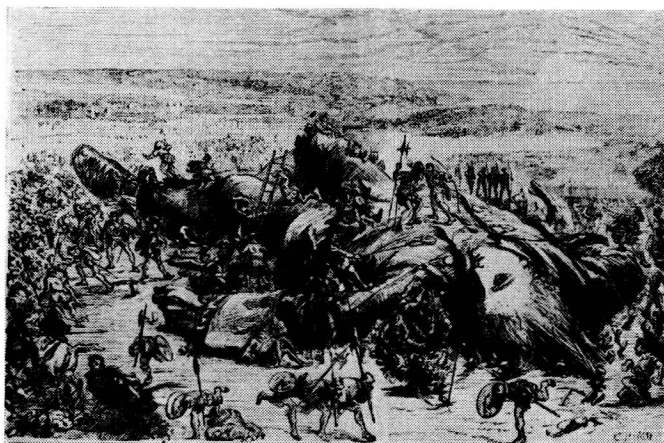
売はそろそろ左前ひだりまへになつてくる。それというのが同業者のほとんどたいいていのものがやっている不正、そいつを真似ることだけは我輩の良心が許さなかつたからだ。そこで家内や二、三の知人とも相談の上、も一度船に乗る決心をした。それから次々に二つの船の船医を勤め、六年間に数回、東西インドに航海したり、それでまず身代のほうもいくらか殖えたというわけだ。船には相当書物の備えつけがあつたので、ひまな時は古今の文豪の作物を読みふける、で、また上陸の時は土地の人情風俗を観察するなり、言語を勉強するなりして時間を消した。ことに語学の勉強という点では、我輩はよい記憶力のせいもあつてきわめて造作ずさなくやれた。

上にいつた最後の航海があまり思わしい結果でもなかつたので、今度は海もいやになり、いつそ妻子といつしよに暮してみようかという氣になつた。住居も前のオールド・ジュリからフェター横町レイシヤ横町に移り、さらにそこからウオピング***に移つて、まず船乗相手の商売でもしようという心算であつたのだが、それもいつこゝ面白くないかな。今に、今にの空頼みで三年ばかりも経つた末、とうとう『羚羊』号カモシカの船長で、南洋のほうへ出かけようというウイリアム・ブリチャードという男から持ち込まれたうまい話を、我輩は早速承知、船は一六九九年五月四日ブリストル***を出帆、はじめのうちは全く上々首尾の航海

だった。

ところでこの海上の出来事をくどくどと並べ立てて、読者諸君をうるさがらせるのは、いろんな理由でくだらん話だと思う。ただわれわれの船はそこから東インドへの航海中、ひどい暴風雨にあってヴァン・ディー・マンズ・ランドの北西方まで流されていたということだけをいえばよい。天体観測の結果、われわれの位置は南緯三十度二分にあることがわかった。船員のうち十二人は激しい労働と栄養不良で死亡、残りの者もひどい衰弱だった。十一月五日、それは向うでは初夏なので、ひどい霧だったが、その中を船員たちは船から僅々半ケーブルとは離れないところに一つの岩礁を見出した。だがなにしろ猛烈な風なので、たちまち真向微塵に打ちつけてしまつて、船はあつというまに真二つ、六人の船員——我輩もその一人だったのだが——はボートを下ろして、やつとのことで本船と岩礁とから離れることができた。我輩の計測では三リーグばかりも漕いだ頃だろうか、本船にいた時からの労働で疲労しきつていたわれわれは、もうこれ以上どうにも動けなくなつてしまつた。しかたがない、われわれは波のまにまに運を天にまかせていたが、それも半時間ばかりもすると、いきなり北の突風がボートを顛覆してしまつた。ボートの仲間はどうなつたか、それから巖の上に逃げ出した連中も、本船に居残つたも

のも——それはわからない、だがいずれ一人残らず死んだものと我輩は決めている。ところで我輩だが、ただ運命のまにまに泳ぎながら、風と潮流とに押し流されていた。何度も足を下げてみたが、海底にはとどかない。だが、もういいよいいけない、身体が動かなくなつたという時に、ふと気がついてみると背が立つてはいないか。しかもその頃は暴風雨もいちじるしく静まつていた。ひどい遠浅なので、かれこれ一マイルも歩いて、やつと岸に辿りついたようなわけだが、それは夜の八時頃だったかと思える。さらに半マイルばかりも進んでみたが、家一軒、人一人見える様子はない——いや、少なくともひどい衰弱で、そんなものはどうてい眼に入らなかつたのである。極度の疲労だった。それに暑さやら、本船を捨てる時に飲んだ半バインツのブランドイの効き目やらで、すっかり眠くなつた。で、草の上に横になつたが、それがまた短い、柔かい草でそのまま我輩は眠つたの、眠らないの、生まれてこのかたこの時ほどぐっすり眠つたことはなかつた。かれこれ九時間ばかりも眠つたろう。目を覚ましてみるとちやうど夜明けだったから。起きようと思つたが、身体が動かない。なるほど見ると、我輩仰向けに寝ていたのだが、手も足も左右に大地にしっかりと縛りつけられ、長く房々としていた髪の毛も同様である。さらに同じように、腕の下から太股へかけて幾重にも細



い紐が我輩の身体をからんでゐるのに気がついた。ただ仰向けに空が見られるだけである。太陽はだんだん暑くなつてくるし、眼は痛いほどぎらぎらする。周りで何かがやがやという騒ぎが聞こえるのだが、なにぶん今の寝たままでは空しか見えない。やがて我輩の左足を、なにか生き物がごそごそ動いているような気がする、しかもそいつはそろそろ胸の上を通つて、とうとう顎のあたりまでやつて来た。できるだけ下目を使つてみてはじめて分つたことは、それが人間、しかも身の丈六インチではない、それで手には弓矢、背中には箆を負つた人間だということだった。そのうちに我輩はさらに少なくとも四十人余り（全く我輩の推算なのだが）の同類が、その後からぞろぞろついて来ていることが分つた。いや、我輩、驚いたの驚かないの、いきなりわつと大声を立てたものだから、奴さんたち、たちまちたまげて逃げてしまった。後になつて聞いた話では、なんでも四、五人の者は我輩の脇腹から地面へ跳び下りたために、怪我人まで出たそう。だが奴らは直ぐに引返して来た。そして一人の者はとうとう我輩の顔の全貌が見渡せるところまでやつて来たと思うと、さも感に堪えたように、両手と眼を高く挙げながら、黄色い、しかしはつきりした声で、「ヘキナー、ディーガル！」と呼んだのである。と、ほかの連中も何度か同じ言葉を繰り返すのだが、その時は、むろ

ん我輩にはなんのことだかわからなかった。もちろんその間、ご推察までもなく、我輩はなはだ気味悪る悪るじつと寝たままでいた。が、とうとう逃げようと思つて身をもがいてみると、巧い工合に紐が切れて、左腕を地面へ縛りつけている杭をねじ切った。というのは、左腕を顔の前まで持つて来てみて、奴らのくくり方がわかつたからだ。と同時にこいつはだいぶ痛かつたが、力まかせにぐいと一つ引つ張つて、左側の髪の毛を縛っている紐を少しばかり弛めることができ、やつと二インチばかりは首が回るようになった。だが、かんじんの奴らは、引つ捕えてやろうとするうちにまたしても逃げてしまつた。とたんに、ひどく黄色い声でなにか大声に叫んだものがあつたが、やがてそれがやんで、だれか一人、「トルゴウ、フォナック」と怒鳴つたかと思うと、たちまち我輩の左手に百本余りも矢が雨と降りそそぐ、それがまるで針でも刺すようにちくちくするのだ。おまけにちょうどヨーロッパ人が爆弾でも発射するように、大空に向つていつせいに矢を射るのである。とそれが大部分（痛くはいつこうないが）我輩の身体の上に落ちてくるようだし、なかには顔に落ちるものもある。我輩は大急ぎで顔を蔽つたが、この矢の雨がやむと、悲しいやら痛いやらさすかの我輩もうんうん唸りはじめた。そして、またしても逃れようとする、今度は前よりいつそう激しく矢

を射かけてくる。なかには槍をもつて我輩の脇腹を突きに來た奴もあつたが、さいわい、これは革製ジャケットを着ていたので通らなかつた。そこで我輩、これはじつとしているのがいちばんの上策だと思つた。このまま夜になるまで寝ていることだ、夜になれば左手はすでに自由なのだから、逃れるのは造作ない。次ぎは住民どもの問題だが、これはたとえ何千何万押し寄せようと、いま見たような小つぽけな奴らであるかぎり、結構我輩ひとりで十分だ、それは立派に自信があつた。ところがなんと計算はまんまとはずれた。我輩がおとなしくなつたと見ると、奴らはもう矢を射かけるのはやめた、だが、一方、耳に入る騒がしさからすると、人数はいちだんと殖えたらしい。そしてちょうど我輩の右の耳から、ものの十二フィートばかりはなれたところで、かれこれ一時間以上も、まるで一心に働いているような、しきりに物を打つ音が聞こえていた。杭と紐の許すかぎり、顔をそのほうへねじむけてみると、これはまた地面から高さ一フィート半ばかりの舞台ができて上つている。この国の人間なら、まず四人は乗れるかしら。登れるように梯子まで二つ三つかかっている。ところでこの舞台の上に立つて、彼らの一人——どうやら身分のある男らしかつたが——が長い演説をやりだした、むろん、我輩には一語として分らない。だが、そうだ、これだけはいつておかなけれ

ばならない、つまりこの大将らしい男がいよいよ演説をはじめる前に、三度「ラングロウ、デフル、サン！」と大声に叫んだのである（この言葉、それから先刻いった言葉はその後、幾度も聞くことがあって、わけも説明してもらった）。すると五十人ばかりの島民がばらばらとやって来て、我輩の頭の左側を縛っている紐をみんな切ってくれた。そこではじめて我輩も右を向くことができるようになって、例の演説をした男の風采身なりを観察することもできるようになったが、年配は中年といったところか、背丈も侍立している三人——一人は侍童で、主人の裾を捧持しているのだが、背丈はせいぜい中指に毛の生えたくらい、他の二人は両側に立って、脇侍という形だった——よりはひときわ高かった。察するところ、先生、あるいは威嚇（いかく）するごとく、あるいは気をもたせるごとく、あるいは憐れむがごとく、はたまたあるいは慈しむがごとく、その雄弁家ぶりにいたっては、技術まさに百パーセントというところだった。我輩はごく簡単にしかしいとも鞠躬（きくう）如（ごと）たる態度、すなわち日輪も照覧あれとばかりに、高く左手をかかげ、眼ははるかに天をあおいで奉答し奉ったものである。なにしろ本船を見捨てる何時間か前に物を食べたきり、腹はひもじさにぐうぐう鳴るし、それにこのところ自然の要求うたた急なるものがある。もはや我慢はできなくなった。（無作法かなん

だか知らないが）我輩はやたらに口へ指をやつては、欲しいのは食物なのだということを示してやった。ハーゴウ（後になって知ったのだが、太守のことをいうのだ）閣下はよく我輩の意を察してくれて、舞台を降りると、我輩の横つ腹に五、六本梯子を掛けると命令された。すると百人余りとおぼしい島民どもが、めいめい肉を山と盛った籠をもつてはそいつを登り、我輩の口許へとやって来た。どうやらこれは、我輩に関する知らせがあると同時に、国王の命令で調えられ、そしてここへ運ばれて来たものらしい。だいぶんろんな獣肉があったようだが、とても味わいわかることはできなかった。肩の肉、脚の肉、腰の肉、形は羊肉かと思えるようであり、調理も実に見事なものだったが、なにしろ大きさは雲雀（ひば）の翼にも及ばない。一口に二片三片ずつは平らげる、それにパン——これはまた小銃の弾丸ほどの——も一度に三塊ずつ頂戴（ちやうたい）した。どんどん後から給仕してくれるのだが、さすがに我輩の図体と大食とは、ありありと目に見えて驚き呆れているようだった。次ぎにはまた水が欲しいと手真似をしてやった。我輩の大食ぶりからみて、とうていちよつとやそつとのことでは間に合わないと思てか、実に利口な奴らで、彼らは一番の大樽を一つするすると吊し上げたかと思うと、我輩の手のほうへごろごろと転がして来て、ほんとと呑み口を開けてくれた。我輩

は一息に飲み干してしまつたが、なに、あたり前のことで、量といつても半パイントは怪しい、それに味がまたバーガンディの薄口葡萄酒に似て、も一つうまいときているのだから。もう一樽持つて来た、だがこれも同様、そして我輩はもつとくれという手真似をしてみせたのだが、今度はもうないということだった。なにしろこうした奇跡をやつたというので、彼らはもう大喜び、大騒ぎで、我輩の胸の上を小躍りするやら、そしてはあの最初したように、「ヘキナー、ディーガル」を叫ぶのである。彼らは我輩に向つて、二つの空樽を投げおろしてくれろという手真似をしたが、それもまず大声で「ボラック、ミヴォラ！」と叫んで、下の連中に危険だから退け退けと一応警戒を發しておく。さて大樽が宙に舞つたかと思うと、またしてもいつせいに「ヘキナー、ディーガル」のどよめきだ。ありていにいうが、実は彼らが我輩の身体の上を右往左往している間、よっぽどそこらあたり手近の奴を四、五十人、驚づかみにして地面に叩きつけてやろうかと、いくど思つたかしかない、しかしつい先刻になめた痛手——いや、まだもつとひどいのだつてあるかもしれない——の生々しい記憶と、ひとつには男一匹の名譽にかけた誓約——先刻の我輩の鞠躬如たる態度はわれながらどうしてもそう思えるのだ——を考えると、そうした考えはたちまち消えた。それに考えてみても、

これほどまでに金を使い、しかも親身に世話をしてくれた人間に対しては、人間の義理からいつても、むしろ感謝しなければならぬはずだった。それにしてもこの侏儒どもが、我輩の身体に乗つて歩き回る大胆不敵さ、現に我輩の一方の手は自由になっているのだし、彼らから見れば、我輩の身体はずいぶん小山のように見えたであらうのに、それを怖れず平然と歩き回る大胆不敵さはなんとも驚くに堪えぬものだった。しばらくたつて、もう我輩が肉を欲しがらないのを見ると、皇帝陛下からの勅使だという高官の男が我輩の前に現われた。勅使閣下は十二人ばかりのお供を引き連れて、我輩の右脚首の上のくびれから登つて、顔のあたりまでやつて来た。そしてやおら玉璽のある国書を取り出したと思うと、そいつを我輩の目の前へつきつけて十分間ばかりなにかしやべつた。別に怒つた様子はないが、なにか決然たる態度で、しきりに前方を指さした。後になって分つたことだが、それは半マイルばかり離れている国都のほうを指さしていたのだそうで、つまり陛下は枢密院に諮られた結果、是非我輩を連れてくるようにということに決まつたのだそうだ。我輩は言葉少なに答えたが、これは、むろん、なんにもならない、改めて自由になるほうの手で、もう一方の手、それから頭、身体といちいち触つてみせては（むろん、勅使閣下の頭越しにだ、閣下にしろ、お供に



しろ、怪我をさせてはたいへんだから)、自由の身になりたいのだということを手真似で知らせた。これはよく分ったようだった、というのはさも罷りならぬというように勅使閣下は頭を振り、あくまで俘囚として護送されるのだということを手で形をしてみせた。しかしながら、これもまた手真似だが、食物飲料はぞんぶんにとらせるばかりか、十分優遇してとらせるという意味のことをいった。またしても我輩は、ええい、いっそ縄目を切ってしまえと思ったが、あの顔といわず手といわず射かけられる矢の痛み、それはまだすっかり火ぶくれのようになって残っているし、現にまだ刺さったままになっているのさえ少くない。それに敵の人数はますます増加していることを思うと、やはり考え直して、どうでもお好きなようにという心持を手真似で知らせてやった。ハーゴウ閣下の一行は満足そうに、鄭重に挨拶して引き上げて行った。間もなく我輩は、「ポプロム、セラン」という言葉を何度も繰り返しながら、なにか盛んな歓声の挙がるのを聞いた、そして大勢の人間が我輩の左側へ集って来て、少しばかり紐を弛めてくれるのを感じた、それでまあ我輩もやっと右脇に寝返って我慢していた小便をすることができたのである。だがなにしろあまりじゃあじやあやったもので、奴さんたちの驚くまいことか、だが、さいわいに我輩の格好で何をやり出すかはちゃんと分っ

たと見え、奴らはたちまち左右に道を開いて、滔々^{たうたう}と岩に激して落下する急湍^{きうたん}を避けた。だがそれより前に、彼らは我輩の顔と両手に何かひどくよい香りのする香油様のものをいちめんに塗ってくれたが、二、三分もするとあの矢の痛みはけろりとなつてしまった。滋養満点の飲食で大いに元氣恢復した上に、こんなあんばいで今度は眠くなつてしまった。八時間ばかり（後で分つたのだが）も眠つたというが、それも不思議ではない。医者が皇帝の命によつて、あの酒樽のなかに催眠剤を入れておいたというのだから。

思うに、我輩が上陸して地面に眠りこけているのを発見すると、ただちに特使が立つてこれを皇帝に急報したものらしい、早速彼は会議を開いて、とにかく上に述べたようにまず我輩を縛り上げてしまうこと（つまり、それを夜中我輩の眠っている間にやつてしまったのだ）、食物と飲料をどんどん送ること、それから我輩を首都へ連れてくる機械をひとつ用意すること、などを決議したものと見える。

いったい、かかる決議はきわめて大胆かつ危険に思えるかもしれない、また事実同じような場合が起こつても、ヨーロッパの君主などにあまり真似してもらいたくないことはたしかだが、しかし我輩をしていわしむれば、これはきわめて聰明かつ寛大な処置だと思ひのである。な

んとなればもし仮りに彼らが我輩の睡眠に乘じ、矢槍をもつて殺害しようとしても試みたらどうだろう、むろん、我輩は痛みを感じるやいなや眼を覚ましたらうし、その結果は怒り心頭より発して、縛めの紐もなにも断ち切つてしまつたらうばかりか、事ここにいたつては、彼らとしては抵抗する力はない上に、といつていまだ許してくれといえる義理もなかつたらうからである。

島民たちはすべて傑^{すく}れた数学者であり、加えて学問の保護者として命令のあつた皇帝の庇護奨励によつて、機械学の素晴らしい発達を見せていた。皇帝は樹木や、そのほか巨大な物体を運ぶために、車のついた機械をいくつか所蔵していた。よく大木のある森林で、最大の巨艦（といつても九フィートほどのもあるという程度だが）を建造し、それを今いった機械に積んで三、四百ヤード離れた海へと運搬するのである。そこで今度もすぐに五百人の大工と技師とが動員されて、そのなかでも最大の機械を用意することになった。地面から三インチ、長さ七フィート、幅四フィートの木製車台で、これが二十二個の車輪で動く。さつき聞いた歓声というのはこの機械の到着したためであつて、それからみると我輩の上陸四時間後にはすでに出勤したものらしい。寝ている我輩の身体にびったり横付けにされた。だが最大の困難は我輩を担ぎ上げて、この車の上に乗せることだった。まず高